〔報　告〕

岩窟・岩陰型仏堂と木造建築の関係についての調査ノート

Research Notes on the Relationship between Buddhist Halls in Rock Caves or Rock Shelters and Timber Buildings

岡垣　頼和・浅川　滋男

OKAGAKI Yorikazu, ASAKAWA Shigeo

鳥取環境大学紀要

第９号・第10号合併号　2012. 3 抜刷

Reprinted ftom

BULLETIN OF TOTTORI UNIVERSITY OF ENVIRONMENTAL STUDIES

Volumes 9 & 10　Mar. 2012

鳥取環境大学紀要
第９号・第10号合併号（2012. 3）pp.135-157

〔報　告〕

岩窟・岩陰型仏堂と木造建築の関係についての調査ノート

Research Notes on the Relationship between Buddhist Halls in Rock Caves or Rock Shelters and Timber Buildings

岡垣　頼和・浅川　滋男
OKAGAKI Yorikazu, ASAKAWA Shigeo

和文要旨：岩窟もしくは岩陰と複合する懸造の仏堂は山陰各地の霊山における「奥の院」にしばしば建立されている。この種の特殊な仏堂建築を、もう一つの有力な分布域である大分県の六郷満山と比較しつつ分類し、各類型と中国石窟寺院との相関性を検討した。その結果、入母屋造の礼堂を岩窟と密着させて正面に設けるB-2a型が華北の石窟寺院に最も近い一方で、岩窟内に独立した懸造堂宇を設けるB-2b型が華南の福建省に存在することをあきらかにした。現状のデータでは、日本の岩窟・岩陰型仏堂の成立は平安時代後半以降に下る可能性が高いので、南北朝～唐代に隆盛した華北の石窟寺院との間に直接的な系譜関係を認めがたいけれども、華北の石窟寺院は宋代まで存続しており、平安時代の日本に影響を与えなかったと決めつけることも危険であろう。今後はさらに多面的な角度から石窟寺院と岩窟型仏堂に係わるデータを集成し、木造建築との関係という点に焦点を絞って、類型と起源に関する考察を深めてゆきたい。
【キーワード】岩窟・岩陰型仏堂、石窟寺院、懸造、仏龕、洞窟

Abstract：Overhang style Buddhist halls (Kake-zukuri) joined to rock caves or rock shelters were often constructed in the innermost sanctum on sacred mountains in several areas of the San-in district in western Japan. We are attempting to classify the particular kinds of Buddhist hall architecture associated with rock caves or shelters, while comparing the halls with examples from Mt. Roku-go-man-zan in Oita prefecture. Oita Prefecture is another important area for these halls and architecture, and we also examined the relationship between these Japanese halls attached to caves or rock shelters and stone cave temples in China. As a result, we proved that what we have named the B-2a type, Irimoya-zukuri worship hall attached to the rock cave from the front side, most resembles the stone cave temples in North China. In addition, we proved that there are also B-2b type, Kake-zukuri halls in rock caves, in Fujian Province, South China. Based on our research, it is very probable that Buddhist halls joined with rock caves or rock shelters appeared in Japan from the latter half of the Heian period (794-1185). Examining other published research, we find it difficult to accept that these Buddhist halls have a direct genealogical relationship with the stone cave temples in North China which were most popular from the Southern and Northern Dynasties (5th-6th c.) to the Tang Dynasty (618-917). However, it also may be dangerous to assume that Japan in the Heian period received no influence from the stone cave temples in North China, since they continued to be used through the end of the Song Dynasty (960-1279). Henceforward, we will attempt to collect data on Chinese stone cave temples and Japanese Buddhist halls in rock caves or rock shelters, focusing on the relationship between these structures and timber buildings, and deepening the scope of the research to consider both types and origins.

【Keywords】Buddhist halls in rock caves or rock shelters, Stone cave temples, Overhang style Buddhist halls (Kake-zukuri), The inner walls of the altar, Natural caves

１．岩窟・岩陰仏堂と木造建築

１－１　懸造建築と岩窟・岩陰型仏堂

山陰の霊山には、懸造（かけづくり）の仏堂が少なくない。懸造とは、山の斜面にたつ半高床式の建築である。斜面との接点では、地面をほとんどそのまま床とするが、斜面からせり出す部分では宙にいた高床になる。全国的に有名な例を一つあげるとすれば、京都の清水寺本堂（国宝、1633年）になるだろう。清水寺の場合、崖上の床面がひろくせり出して舞台のようになっており、その様式を「舞台造」とも呼ぶ。鳥取県三朝町の三仏寺投入堂（国宝、平安時代後期）は平安密教建築の数少ない遺構であり、年代の古さも手伝って、清水寺本堂と並ぶ懸造建築の双璧としてしばしば引用される。しかし、投入堂の場合、だれがどうみても「舞台造」という用語に似つかわしくない。それは、絶壁を構成する玄武岩層と凝灰岩層の接点に形成された岩陰のくぼみにたつ小さな懸造の仏堂である（図１）。規模は小さいながらも、そのアクロバティックな立地にだれもが驚かされ、圧倒される。このような絶壁にたつ懸造の密教系仏堂は全国的に分布している（図２）[1]。ただし、山陰地方の場合、たんなる懸造の木造建築ではなく、懸造と複合した岩窟仏堂、懸造の複合しない小さな岩窟仏堂・岩陰仏堂に加えて、出雲市平田の鰐淵寺蔵王堂のように、岩窟・懸造仏堂の正面に滝が流れ落ちる例など、多様な仏堂のあり方を確認できる。このような山岳型の特殊な仏堂を有する寺院の多くは、８世紀以前に開山し、平安時代に純密（天台宗）の寺院として再興されたという二重構造の縁起をもっている。そして、岩窟や懸造を仏堂とする領域は８世紀以前の縁起に由来する「奥の院」に立地しており、本堂（根本堂）を中核とする山麓の境内とは離れたエリアにゾーニングされる傾向がみとめられる[2]。ところが、三仏寺投入堂に代表されるように、「奥の院」に建立された懸造の建築物は平安時代後期以降のものばかりという時系列的な矛盾をはらんでいる。

これまで鳥取環境大学浅川研究室では、山陰地方と大分県の霊山を巡礼して懸造仏堂や岩窟仏堂などの調査をおこなうとともに、大陸にも足をのばして、中国の石窟寺院や周辺諸地域の関係遺構の視察を進めてきた。本稿では、岩窟（もしくは石窟）と木造建築（とくに懸造）の関係に焦点を絞り、これまでの調査成果を報告するものである。

１－２　大給友樹の研究成果

浅川研究室７期生の大給友樹（現日本住宅パネル工業組合）は、2009年度１月末に提出した卒業論文において、山陰に地方に多い岩窟・岩陰・絶壁と複合する特殊な仏堂を「岩窟／絶壁型仏堂」と称し、おもに懸造建築との関係から、以下のような類型化を試みている[3]。

Ａ型：岩窟（岩陰）単独内陣型
Ｂ型：岩窟・懸造複合型
　Ｂ－１型：岩窟（内陣）／懸造（礼堂）型
　Ｂ－２型：岩窟＝懸造（内陣）型
Ｃ型：懸造単独内陣型

まずＡ型は絶壁に小さな岩窟を掘削し、中に仏龕を設けるタイプ。岩窟のみという素朴な仏堂であり、隠岐島前の「壇境の滝（壇境神社）」と焼火神社、大山寺本堂

図１　三仏寺投入堂（国宝、平安後期）

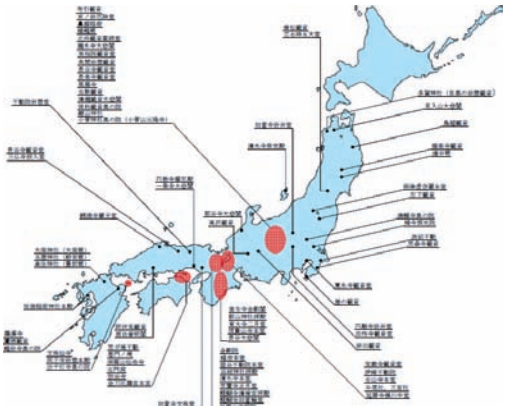

図２　懸造建築の全国分布図

図３　不動院岩屋堂（若桜町）

図４　岩屋神社（若桜町）

背後の山などに、この種の小型岩窟仏堂を発見した（壇境神社と焼火神社は明治の廃仏毀釈以前、いずれも真言宗寺院であった）。ただし、当初存在した庇状の木造建築が腐朽してしまった可能性があり、成立年代も不明である。Ｂ型は２つの亜型に細分される。Ｂ－１型は、千手院窟堂跡（鳥取県八頭町、江戸時代？）や鰐淵寺蔵王堂（島根県出雲市、江戸時代）のように、岩窟の正面に設けた懸造建築が礼堂になっているタイプであり、「岩窟＝内陣、懸造＝礼堂」という機能分化を看取できる。いわゆる「内陣礼堂造」の一種としてとらえることができよう。この構成が、雲岡石窟の第５・６窟（清代）における石窟と楼閣の複合的空間構成に近似することを、大給は卒業論文で指摘している。Ｂ－２型は、岩窟に懸造の本堂をすっぽり収めてしまうタイプ。不動院岩屋堂（鳥取県若桜町、室町時代初期）や焼火神社本殿（旧焼火山雲上寺本堂、江戸時代）がその代表である。Ｃ型は三仏寺投入堂のように、岩窟を伴わない懸造建築だけのタイプ。ただし、投入堂の場合、断層の切れ目にあたる岩陰につくられた懸造であり、Ｂ－２型に近い形式であるという見方もできる。中国山西省渾源の懸空寺（清代）は、窪みや岩陰のない絶壁に形成された懸造建築（中国語では「吊脚楼」）であり、Ｃ型の典型と呼ぶにふさわしい遺構である。懸空寺の現存遺構は清代のものだが、寺院の成立は北魏時代に遡り、近隣の雲岡石窟寺院とほぼ同時に出発している点には注目せざるをえない。

大給は、こうした日中両国の遺構を比較検討するなかで、韓国慶州に残る統一新羅時代の石窟庵（世界文化遺産、８世紀中葉）にも注目している。インドに起源する石窟寺院は、中国まで伝播したが、朝鮮半島や日本列島には至らなかった。しかしながら、新羅の景徳王は、華北の石窟寺院に憧れをいだき、「石窟庵」を造営した。巨大な横穴を掘って石窟を造ることはできなかったけれども、切石を積み上げて、人工の石窟寺院を築いてみせたのである。それは、華北に卓越した石窟寺院に対する新羅王朝の憧れを如実に示す物証である。とすれば、日本列島の山間部に残る岩窟や岩陰を利用した仏堂が中国の石窟寺院を模倣しようとする憧れの産物である可能性もまた捨てきれないであろう。本稿は2010年度以降の調査データ等を最大限に活用し、大給の研究成果をさらに発展させようという目標に向けての中間報告でもある。

１－３　その後の展開

大給は、2010年２月27日開催の国際シンポジウム「大山・隠岐・三徳山 －山岳信仰と文化的景観－」において卒業論文の概要を発表した[4]。このシンポジウムは、鳥取県における世界遺産構想の枠組の再構築をめざしたものであり、三徳山のみにこだわらず、山陰各地の密教系の関連資産に注目して研究を深め、とりわけ二重構造の縁起をもつ寺院の「奥の院」について考古学的研究を進める必要がある、というのが重要な結論のひとつであった[5]。

その後、国際シンポジウムに相前後して申請していた科学研究費基盤研究Ｃ「石窟寺院への憧憬－岩窟／絶壁型仏堂の類型と源流に関する比較研究－」（代表者・浅川滋男）が2010年４月に採択され、同年８月３日から11月30日まで摩尼寺「奥の院」遺跡（鳥取市覚寺）の発掘調査をおこなった[6]。後述するように、摩尼寺もまた二重構造の縁起をもつ天台宗の寺院であり、因幡を代表する霊山として名高い。発掘調査に係わる考古学的研究は現在進行中であり、正式な報告書の刊行は2011年度末以降になるであろう。

こうした発掘調査と考古学的研究に加え、国内外での

図５　千手院窟堂跡（八頭町柿原）

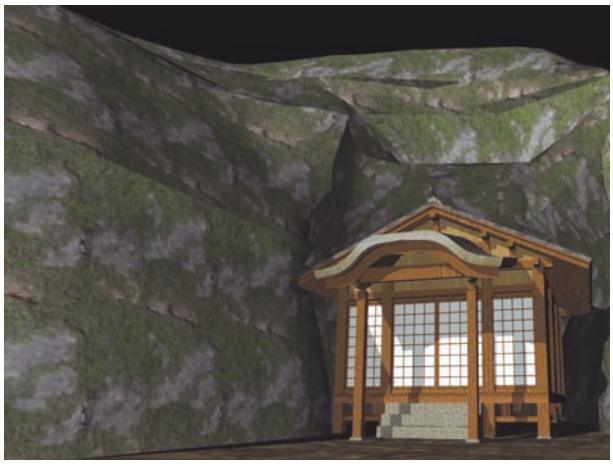

図６　千手院窟堂復元 CG（浅川研究室2009）

関連資産の調査も進めている。2009年度から現在までに、国内では隠岐・出雲・伯耆・因幡の霊山巡礼に始まり、熊野古道（和歌山・奈良）や六郷満山（大分）を視察した。また、国外では2010年度までに中国山西省、同甘粛省、韓国慶州の霊山と関連建築資産を訪問し、2011年度は中国新疆ウィグル自治区に残る中国最古の寺院「キジル千仏洞」を訪問するとともに、ラオスとミャンマーの洞窟寺院も視察している。本稿では、大給卒業論文前後におこなったフィールドワークのデータをできるだけ活用して考察を進めていく。

２．日本の岩窟・岩陰型仏堂

懸造仏堂・岩窟仏堂については、日本全国の霊山におけるデータが必要であることは承知しているが、現在までに視察を終えた地域は山陰地方と大分県のみである。いずれも懸造仏堂・岩窟仏堂を豊富に残す地域であり、この両地域で視察した関連遺構についてまずは述べておく。

２-１　山陰地方の岩窟・岩陰型仏堂

（１）因幡の遺構

不動院岩屋堂（鳥取県若桜町）　若桜から戸倉峠方面へ約５㎞、八東川と吉川川の合流地点にあたる岩屋堂集落に所在する懸造の仏堂（図３）。集落はかつて「柿原」という名前であったが、その後関所が設けられ、人々の出会いの場になったことから「出会い（出合）村」となり、仏堂が建てられた後、それがあまりにも目立つので「岩屋堂村」となって、現在の「岩屋堂」に至る[7]。ただし、名称と改名に関する詳しい文献等が残っておらず、集落の成立年代は不明である。不動院所有の『書上帳』によると、岩屋堂は「大同元年（806）に飛騨の匠によって建築され、空海（弘法大師）によって本尊の不動明王坐像が彫刻された」との記述がある[8]。平安初期の建立で、空海と縁のある真言密教の寺院とされるが、起源の真偽も定かではない。岩屋堂は数少ない中世の寺院建築であることから、昭和28年（1953）11月14日に国指定重要文化財に指定された。なお、岩屋堂には「妙見山神光寺」という別名がある。

岩屋堂の構造形式は懸造平入で、平面は正面３間×側面４間、こけら葺きの屋根は前方が入母屋造、後方が切妻造となっている。人工的に掘削された大きな岩窟に懸造の仏堂をすっぽりおさめている。昭和30～32年にかけておこなわれた解体修理によると、柱及び舟肘木の面取や正面の花頭窓、須弥壇廻りなどの様式から室町時代初期（南北朝期）の再建ということが判明した[9]。

岩屋堂直下の岩陰には「岩屋神社」が建っている（図４）。本殿の絵様など細部様式をみると、幕末に近い江戸時代後期の作と推定されるが、おそらくそれは造替の年代であり、それ以前から岩陰に神社本殿が建っていた可能性が高いであろう。寺院と神社の複合した神仏習合は江戸時代までは当然のごとく存在したが、明治の廃仏毀釈によって多くの寺院が撤去の危険にさらされた。不動院岩屋堂も例外ではなかったが、集落の人々が反対して嘆願書を提出したことにより危機を免れたという[10]。

千手院窟堂（鳥取県八頭郡八頭町柿原）　2009年度の不動院岩屋堂におけるヒアリング調査によって発見した岩窟仏堂跡（図５）。「洞穴の金鶏」伝承が岩屋堂集落で語り継がれている。

> 八頭郡八頭町柿原の北にある水無瀬山のふもとに、大きな洞穴があり、中に千手観音が祀られている。この洞穴の中にはもう一つ小さな洞穴があり、それは八頭郡若桜町の岩屋堂にある洞穴に通じている。

この全長20㎞もある長い洞穴の中には昔から金色の鶏が住んでいると言われ、柿原地区で鶏を飼うといつの間にか鶏は姿を消してしまうため柿原地区では決して鶏を飼わないようになった[11]。

この伝承にいう「水無瀬山のふもとの洞穴」を求めて、八頭町柿原地区でヒアリングをおこない、周辺住民の案内で伝説の洞穴をみつけることができた。『因幡誌』（1795）によると、この洞穴は通称「窟堂」とも呼ぶ。草創・由来ともに不詳で、横２間、高さ１間、奥行２間ほどの岩窟内に堂宇を設け、千手観音が安置してあった[12]。また、『因幡誌』所載の千手院の絵図[13]をみると、たしかに大きな岩窟内に向唐破風の向拝をもつ妻入の堂宇が描かれている。現地視察の結果、岩窟内には多くの平たい石（長さ40～50㎝）が壁面にむかって立てかけられていたのだが、それぞれに番付がなされ、その上に梵字の刻印を確認できた。岩窟の下側には、石垣で囲まれた平坦面が段畑のように連なっており、かつての境内の遺構である可能性も否定できない。ヒアリングによると、およそ50年前までは、岩窟の周辺に千手院窟堂（いわやどう）の建物が存在していたとのことである。

実際、岩窟の正面の地表面上には、礎石と思しき平滑な石が規則正しく並んで残っている。その測量調査成果と『因幡誌』掲載絵図の対照から建物は梁間２間 × 桁行３間の妻入形式と推定され、岩窟周辺に桟瓦の破片が散在することから江戸時代風の桟瓦葺きに復元した（図6）。また、絵図には軒唐破風付向拝も描かれているので、向拝は唐破風銅板葺きとした。ところで、千手観音はいったいどこに祀られていたのか。大給は前掲卒業論文において、千手院窟堂をＢ－１型に分類している。すなわち、仏像は岩窟内部に祀られ、木造建築を礼堂とみなしているのである。その根拠は、梵字を彫った平らな石を石仏の省略形とみて、千手観音を荘厳するものと考えたからである。この場合は、あきらかに外側の木造建築は礼堂になるが、親近関係にある不動院岩屋堂が仏像を安置する本堂であるだけに、現状では礼堂とも本堂ともみなし難いだろう。

すでに述べたように、千手院の岩窟には若桜町の不動院岩屋堂に通じているとする伝説がある。しかも、不動院のある岩屋堂集落の旧名が当初「柿原」であったことが判明した。不動院岩屋堂と岩屋山千手院の「岩屋」も共通しており、千手院窟堂の窟堂も「いわやどう」と読む。これらの固有名称の類似性は、直線距離で11㎞離れた二つの村が親しい関係にあったことを暗示している。おそらく、二つの村は「本村」と「分村」の関係にあったのだろう。常識的には、平安時代大同年間から記録の残る不動院岩屋堂が本村、江戸時代よりも古い文献記録のない千手院（柿原）のほうが分村と考えられる。千手院窟堂は岩窟をふさぐように建っており、岩窟内部に対して「仮面」の役割を果たしている。洞窟に金鶏が住んでいて、不動院と千手院の岩窟は細い抜け穴でつながっているという伝説は、仏堂の外にいる限り確かめることができない。実際には存在しないにも拘わらず、金鶏の洞穴伝説が長く語り継がれてきたのは、千手院と不動院の仏堂が岩窟を遮蔽していることと係わっているのではないだろうか。

摩尼寺「奥の院」遺跡（鳥取県鳥取市覚寺）　喜見山摩尼寺は天台宗の古刹であり、鳥取県内では大山寺、三仏寺と並ぶ天台宗の拠点である。平安後期ころから因幡の死者の霊魂はすべて摩尼山を経由して極楽に行くと信じられていた[14]。天和３年（1683）編纂の縁起書によれば、承和年間（834～848年）に比叡山第三代座主、円仁が開山したと伝え、その境内が「奥の院」にあたる。

図７　摩尼寺「奥の院」岩窟仏堂と五輪塔

図８　摩尼寺「奥の院」岩陰仏堂と石仏群

図９　摩尼寺「奥の院」加工段（埋め戻し後）

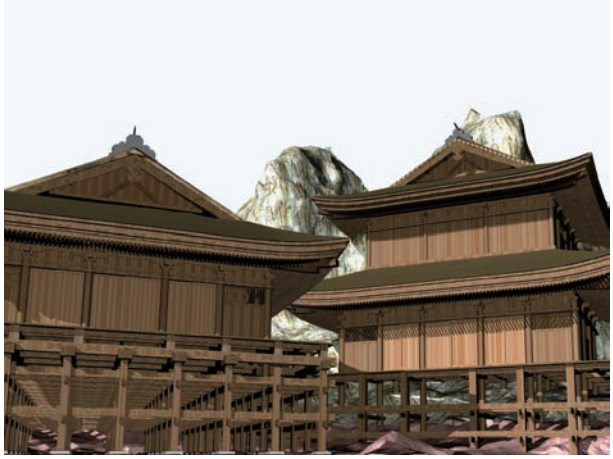

図10　摩尼寺「奥の院」復元景観 CG（浅川研究室2010）

その後、天正９年（1581）、秀吉の鳥取城攻めの際に焼き討ちにあって荒廃するも、元和３年（1617年）に池田光政が再興したと伝える。ただし、これら縁起の記載内容については信頼性を疑う声がないわけではない[15]。

摩尼寺「奥の院」遺跡は、山頂の立岩から60m ほど下ったところにある。喜見城の下にある行場（道場）という位置づけであろうか。そこには五輪塔や石仏・木彫仏を納める小さな岩窟（図６）と大きな岩陰の仏堂（図８）が二層になって穿たれ、その正面の加工段（斜面を掘削・整地して形成した平坦地）地表面にたくさんの礎石が顔を出している（図９）。

発掘調査の成果として、上層と下層の両面で建物跡を確認し、奥の院は建物が２度建替わっていることが明らかとなった。下層では凝灰岩の岩盤を検出し、岩盤には無数のピットが穿たれていた。このうちほぼ正方形を呈する柱穴を検出しており、７尺等間に並ぶ柱穴列を確認した。また直交方向に掘立柱の掘形・抜取穴を検出している。建物の規模は不明だが、岩盤上のピットに柱を立て、その正面に掘立柱の土庇を付加した建物が存在したと思われる。上層建物は、加工段全域に及ぶ範囲で、グリッド状に配置される礎石や礎石抜取穴を検出した。その一部は斜面にもおよんでおり、斜面に立地する懸造の礎石建築と推定される。その平面は東西８間（52尺）以上×南北８間（48尺）以上に復元できる[16]。

検出した遺構と出土遺物から摩尼寺「奥の院」の変遷をみておこう。奈良・平安時代初期に遡りうる土器が20点以上出土しており、円仁の時代以前から「奥の院」でヒトが活動していた可能性がある。下層の形成年代については、出土した土器片から現状では「10世紀以降」の整地と推定している。ただし、10世紀に下層の仏堂が建立され、上層整地の年代まで存続したとすれば下層の期間が長すぎる。常識的にみれば平安時代後期（12世紀？）以降に加工段が整地されたものではなかろうか。いずれにしても、円仁開山伝承よりも新しい時代になってから「奥の院」に天台宗の境内が成立したと考えられる。上層遺構については整地土に中世後期以降の土器・五輪塔を含むので、「室町時代後期以降」の成立と考えられる。『因幡民談記』（1688）にみる２棟の建物のうち、手前の楼造が上層の建物にあたり、1700年前後までは存続していたと思われる。また、岩陰直下で柱穴を検出しており、これは絵図に描く奥側の建物を構成するもので、岩窟・岩陰仏堂と一体化した二重入母屋造の建物と推定される。中世仏堂・懸造建築の類例を参照し、床下は８間×９間、床上は５間×７間の妻入形式入母屋造トチ葺の山陰色の濃い懸造の大型仏堂を再現した（図10）[17]。

（２）伯耆と出雲の遺構

三徳山三仏寺投入堂（鳥取県三朝町）　三徳山は、修験道の開祖といわれる役小角が、慶雲３年（706）に開山し、嘉祥２年（849）に円仁が釈迦・阿弥陀・大日の三仏を安置して、三徳山三仏寺と号したと伝承されている。しかし、史料の上では、平安時代の寿永３年（1184）「後白河天皇の御子と称する者がおり云々」というのが三徳山に係わる最初の記載である。三徳山の本尊、蔵王権現は木造の寄木造りで、胎内の文書から仁安３年（1168）に造られたことが知られる。その蔵王権現を安置する「奥の院」の投入堂は、年輪年代学によって1100年前後の建築だということが分かっており、確実な歴史は12世紀以降に下る。

円仁の中興伝説については、野本覚成が力説するように（注15参照）、円仁開山伝承をもつ寺院は全国に数百あり、そのうち約半数は年代に矛盾があって、残りの約半数の寺院を短期間に造るのは不可能と言えるであろ

う。三徳山にあっても、寺伝にいう円仁開基伝承を鵜呑みにはできない。本堂を中心とする山麓の境内は、おそらく整備の開始年代が平安時代後期まで下るものと推定される。

一方の「奥の院」であるが、役小角が蔵王権現・子守明神・勝手明神を祀り、投入堂を法力で投げ入れたと伝承されている。蔵王権現・子守明神・勝手明神を祀るのは、修験道の本山、奈良県吉野の金峰山と同じである。金峰山は、役小角が蔵王権現を感得した山でもある。しかしながら、上に述べたように、蔵王堂と愛染堂の複合した現在の投入堂の建立年代は1100年ころであり、一部の古材がそれよりも古い年輪年代を示していることを信頼して、前身建物がかりに存在するにしても、その年代が７世紀に遡る可能性は低いと言わざるをえない。ただし、役行者の時代に「奥の院」が行場や祭場として使われていた可能性まで否定できるわけではない。投入堂の構造形式は、懸造平入で、正面二間×側面一間の身舎に高欄付きの縁を鍵の手状にめぐらす。屋根は身舎を桧皮葺流造とし脇の庇を落屋根とする。投入堂の西側には一間四方切妻屋根の愛染堂が付属する。玄武岩層と凝灰岩層の境目に形成された岩陰の絶壁に建てられた仏堂である（図１）。

三徳山の場合、役行者の開基伝承がある投入堂を中心とするエリアと、円仁再興伝承のある本堂を中心とする麓の境内エリアの２つに分かれ、それぞれにふさわしい縁起が残っている点に注目したい。

鰐淵寺蔵王堂（島根県出雲市平田町）　浮浪山鰐淵寺は、島根半島北端の山麓に所在する。とりわけ中世において、北山山系の真反対に位置する出雲大社と係わりの深い天台宗の寺院であった。開山の縁起は古く、「推古天皇２年（594年）、信濃の智春上人が当地の浮浪の滝に祈って推古天皇の眼疾が平癒した。このため、推古天皇の勅願寺として開基した」という[18]。その智春上人が浮浪滝のほとりで修行をおこなっていた際、誤って滝壺に仏具を落としてしまった。ところが、その滝壺は日本海につながっていて、鰐の鰓（えら）に引っ掛けて仏具をひろいあげたとも伝える。この伝承を鵜呑みにするわけにはいかないけれども、６世紀末の開山伝承があるということと、その伝承が山上の絶壁・岩窟・滝のエリアに結びついている点にひとまず注意しなければならない。ここには、絶壁に穿たれた岩窟に懸造の蔵王堂が収まるだけでなく、その前を滝が流れ落ちている（図11）。

一方、「伝教大師が比叡山に天台宗を開くと、慈覚大師の薦めもあり、日本で最初の延暦寺の末寺となった」

図11　鰐淵寺蔵王堂（出雲市平田町）

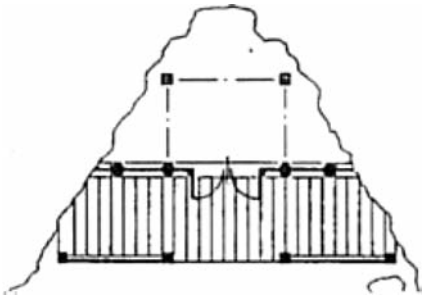

図12　鰐淵寺蔵王堂平面図［松崎1987より転載］

図13　鰐淵寺蔵王堂繋虹梁

との縁起もある[19]。滝の下流にひろがる根本堂を中心とする境内をさすのであろう。いわゆる「雑密」の行場が山上にあって、その縁起は６世紀末まで遡るのに対して、９世紀以降の円仁（あるいは天台宗）に関わる根本堂周辺の山麓エリアの２つが浮浪山鰐淵寺を構成しているのである。こういう二重構造の縁起とゾーニングは、三徳山三仏寺、大山寺、摩尼寺とも共通している。

鰐淵寺浮浪滝および背後の絶壁に建てられた蔵王堂は出雲における蔵王信仰の拠点とされていた。天台宗の古刹で、この浮浪滝と滝裏の蔵王宝窟および宝窟前の涌水を信仰対象として始められたと考えられているが、蔵王堂は宝窟の入口を被うようにして建つ。松崎照明［1987］の実測図によると、懸造の蔵王堂は礼堂にあたり、蔵王権現は岩窟に祀られているようにもみえるが（図12）、木造建築部は岩窟を遮蔽する正面三間の壁・戸口とその前に附属する縁のみであって、岩窟内部には２本の柱を立てるにすぎない。つまり、木造の側壁、後壁はなく、岩窟そのものを活用しているのである。千鳥破風をともなう片流れの屋根を、縁・正面各４本、堂内２本の計10本の柱で支え、堂内に床を張っていない[20]。以上から、蔵王堂は中国石窟寺院の「窟檐」によく似た岩窟の遮蔽装置であることが分かる。なお、木造の部材は新しくみえる。近代の再建ではないかと思われるが、繋虹梁には古材を再利用している。その材は風蝕が激しく、絵様と風蝕からみるに江戸時代後期に遡るであろう（図13）。

（３）隠岐の遺構

壇鏡の滝・壇鏡神社（島根県隠岐島後）　隠岐島後の「壇鏡の滝」は、江戸時代まで密教寺院の行場であった。明治３年（1870）前後に吹き荒れた廃仏毀釈の嵐に隠岐の仏教寺院はことごとく巻き込まれ、取り壊されるか神社に衣替えさせられた。ここでも廃仏毀釈の際に下流の寺院が解体され、明治40年に峯津神社・住吉神社・三保神社・壇鏡神社を合併して壇鏡神社が新設された。別名、那久神社ともいう[21]。

山上の駐車場で車を下りて、鳥居をくぐり、参道を歩いてゆくと左手に小さめの雌滝が視界に納まる。随神門をくぐると、今度はさらに高く迫力のある雄滝が右手に見えてくる（図14）。この２本の滝に圧倒されながらさらに歩を進めると、絶壁に食い込んだ神社があらわれ、滝の向こうに穿たれた小さな岩窟が目に入る（図15）。岩窟は半円形の断面を呈し、横幅・高さともに約２ｍを測る。内部には、廃仏毀釈の際にもちこまれた本尊と滝観音を安置している。

焼火神社（島根県隠岐島前）　山腹の絶壁・斜面を

図14　壇鏡の滝と壇鏡神社（隠岐島後）

図15　壇鏡の滝背面の小岩窟仏堂

図16　焼火神社本殿（左）拝殿（右）

利用して本殿と拝殿を通殿がＬ字型につないでおり、権現造のバリエーションにみえる。明治の廃仏毀釈以前は、真言宗の寺院「焼火山雲上寺」であった。縁起によると、一条天皇（在位986～1011）の頃、西ノ島の海上に赤々と燃える火があり、数日間飛行した後に焼火山に入ったため、村人が登ってみると山頂近くに数十メートルの岩壁がそそり立ち、あたかも仏像のようにみえたため、一宇の堂を建てて祀ったのが始まりだという[22]。本尊の地蔵菩薩だけでなく、焼火権現を併祀していたことを評価され、隠岐では唯一建造物の取り壊しを免れ、神社として生まれ変わった寺院である。

本殿は大きな岩窟に覆われており、銅版葺の軒唐破風付一間社流造の懸造建築である（図16）。拝殿は銅版葺入母屋造妻入で正面向拝に軒唐破風をつける。平面は桁行４間×梁間３間で、方位は本殿と直行し、両者を通殿がつなぐ。しかし、本殿はあまりに「神社本殿」らしく、廃仏毀釈以前の仏堂の姿としてふさわしくない。軒唐破風付流造の屋根は廃仏毀釈運動に伴ってなされた明治期の大改修であろう。

また、本殿岩窟の脇には小型の岩窟もあり、石仏と祠が祀られている。本殿をおさめる大きな岩窟は、建築が付随していることから、小型の岩窟よりもやや遅れた時代の発展した姿を示すものと考えることができる。

２-２　六郷満山とその周辺

大分県国東半島の六郷満山28寺（現在は33寺）は、宇佐神宮の境内にあった弥勒寺の僧侶が峯入りの行場として道場を設けたのが起源であろうと言われる。宇佐神宮が現在地に遷座したのは神亀２年（725）、その境内に弥勒寺が移転されたのは天平10年（738）とされるが、宇佐八幡神の化身とされる仁聞菩薩が六郷満山28寺を開創したのは養老２年（718）に遡ると伝承される。仁聞は弥勒寺の僧であるとも伝えられるが、実在は疑わしく、弥勒寺の複数の僧が半島の山に分け入って次々に寺を設けたのだろうと推定されている[23]。国東は両子山を頂点とする円錐形の半島である。地形の全体はなだらかだが、ところどころに巨岩・奇石が屹立して、両子山の子どものような小峰が高さを競い合い、その小峰ごとに寺院が境内を構えたから、六郷満山の最盛期には65寺を数えた。それらは、宇佐の境外神宮寺のようなものである。いずれも天台宗の寺院だが、初期山岳仏教、天台密教、八幡信仰が混然一体となった姿を「奥の院」にみることができる。

六郷満山およびその周辺の霊山では、岩窟と複合した懸造仏堂のバリエーションが多種多様にみられる。ここでは、単純な構造形式から順に解説しておく。

龍岩寺「奥の院」（宇佐市院内町）　六郷満山に近い宇佐市院内町の清浄山龍岩寺は天平18年（746）、僧行基による開山という伝承があり、礼堂（重要文化財）は鎌倉時代の建立とされる。桁行３間×梁間２間。平屋の懸造。片流板葺。棟木下端に、「奉修造岩屋堂一宇□□□弘安九年丙戌二月二十二日　大旦那沙弥」の墨書銘がある。豊後でもまた「岩屋堂」という呼称が使われている点、興味深い。龍岩寺には「奥の院」がある。急勾配の石段を駆け上がっていくと、民家のような本堂があり、そこで入山料を払って奥の院の参道に足を踏み込む。石段は続き、岩盤を穿つトンネルをくぐると、絶壁から飛び出した懸造建築の礼堂があらわれる（図17）。岩窟のなかには阿弥陀如来を中央に、向かって右に薬師如来、左に不動明王を配する。石仏でも塑像でもなく、大きな木彫の座像である。その前に懸造の礼堂が建てられ、３体の木像を保護している。この懸造建築はたしかに礼堂

図17　龍岩寺「奥の院」礼堂（宇佐市院内町）

図18　臼杵磨崖仏ホキ石仏第２群第２龕

図19　胎蔵寺「奥の院」本殿（六郷満山）

図20　両子寺「奥の院」本殿（六郷満山）

ではあるけれども、岩窟の上部から外側に向かってのびる片流れ屋根の素朴な建物で、中国石窟寺院の「窟檐」が大きくなったような建築物にみえる。組物は舟肘木。床上の柱を立てる柱盤の下のみ大引が吹き寄せになっており、基礎は岩盤に穴をあけ、面取角柱を落とし込む。内部はきわめて素朴な構造・意匠をしている。

日本型の岩窟仏堂の正面外側には、龍岩寺「奥の院」礼堂の差し掛け庇のような「礼堂」兼「窟檐」があっただろうと密かに思い続けてきて、その「仮想の典型」に龍岩寺でようやく出会った。臼杵石仏（図18）の正面にも鎌倉時代の礎石が残っているが、龍岩寺「奥の院」のような窟檐的礼堂を想定できるかもしれない。

胎蔵寺「奥の院」（国東市国見町）　熊野磨崖仏で知られる豊後高田市の今熊野山胎蔵寺は、国東半島を構成する田原山（鋸山）の山麓に境内を構える。茅葺き寄棟造の本堂と護摩堂が軒を連ねる姿は民家と変わらない。そこから急峻な山道を10分ばかり駆け上がると、崖の岩を彫りあげた２体の巨大な磨崖仏があらわれる。むかって左が不動明王、右が大日如来。磨崖仏からさらに50mばかり上がると「奥の院」の上段に熊野神社があり、三間社流造の本殿が岩窟にくい込んでいる（図19）。本殿は舟肘木の組物でやや派手にみせるが、絵様はなく、年代は不詳。ただし、権現造のように本殿と一体化してみえる拝殿の絵様は、18世紀の様式を示しており、そのころの「再建」であろう。このように、「奥の院」に神社を配する傾向のあることが六郷満山の特徴であり、山陰以上に神仏習合の匂いが強い。それは、いうまでもなく、宇佐神宮の影響によるものである。

龍岩寺奥の院の「片流れ」礼堂に対して、熊野神社の本殿は、それが一歩進んだ招き屋根の「流造」である。岩窟仏堂の保護施設兼礼拝施設として「片流れ」屋根が「流造」に展開するのは、ごく自然のなりゆきであろう。

両子寺「奥の院」（国東市安岐町）　半島のいただきに近い六郷満山総持院の両子寺は、正確には「足曳山両子寺」という。両子山頂を近くに望めるが、その麓に境内を構えたのではなく、少し離れた足曳山を行場としたということであろう。ここにももちろん「奥の院」がある。熊野磨崖仏と同じ垂直の絶壁がそこにはあり、その正面に派手な入母屋造の「本殿」が前方の谷に向かってせり出していた。それほど床の高い懸造ではない。ただ、千鳥破風と軒唐破風のついた入母屋造平入の屋根と縁をめぐる赤い欄干に強く目をひきつけられる（図20）。銅板葺きの屋根は棟を岩肌に密着させている。平入の入母屋造「本殿」は棟筋で二等分され、その前面のみ屋外に露出されているのである。崖の内側に本殿はくいこんでいて、内陣の仏像を保護している。本尊は十一面千手観音であり、向かって右に宇佐八幡神、左に仁聞菩薩を配するだけでなく、観音と八幡神・仁聞菩薩のあいだに２体の両子大権現を置く。ここにいう仁聞菩薩は、六郷満山の文化を語るにさけて通れない存在である。六郷満山の多くの寺院は、仁聞菩薩[24]が養老２年（718）に開いたという縁起をもっている。

驚いたことに、両子寺の「奥の院」では、本殿の裏側の岩窟に入れるようになっている。「奥の院」の岩屋洞窟には「石造千手観音と不老長寿の霊水あり」との札があり、中に入る片開きの板戸があいていた。ここにみる絶壁と岩窟が人工の開削であり、前方に築かれた本殿が江戸時代の建築であるのはあきらかだが、絶壁と岩窟の造営年代が仁聞菩薩の時代に遡る可能性がないとはいえない。

一方、本殿の建築は禅宗様の匂いがつよい。反りの強い尾垂木をもつ二手先の組物や火頭窓、そして拳鼻の意

匠にその傾向が顕著にあらわれている。また、拳鼻の絵様は、渦が円形に近い、彫りも細めなので、18世紀の「造替（再建）」とみればよいであろう。

文殊仙寺「奥の院」（国東市国東町）　国東半島の峨眉山に文殊仙寺という寺院がある。648年、役行者の開基と伝えられているから、六郷満山33ヶ寺のうち縁起が最も古い寺の一つである。要するに、三徳山タイプの縁起をもっていて、宇佐八幡より１世紀古く起源を遡らせている。奥の院には役行者を祭る岩窟が残っている。門前案内板に掲載された寺伝を抜粋しておく。

役小角は豊後国国東峨眉山（文殊山）に登り、此地を開き住す。乃ち中国五台山を感得、文殊菩薩の尊像を奉安する。故に文殊仙寺と曰う。山上水無し、小角自ら独鈷を執り岩角を打てば冷水湧出。故に文殊智水と名づく（豊鐘善鳴録、豊後国志）。……（略）……古来より宇佐八幡宮との連携、神仏習合の形態を保つ山岳修験、六郷満山峰入行の修法を伝承している。

岩窟にほぼ接するように文殊堂が建てられている（図21･22）。この「奥の院」文殊堂を、ここでもまた「本殿」と呼ぶ。「宇佐八幡宮との連携、神仏習合の形態を保つ」証しの一つと言えるだろう。本殿の構造形式は両子寺と似て、開削した絶壁に入母屋造の懸造建築を半分だけつけたものだが、両子寺が平入であるのに対して、文殊仙寺では妻入の形式とする。正面の内陣に文殊菩薩を祀るが、その奥の室外に祭場はないようで、その代わりに本殿脇に行者岩窟を設けているのであろう。

本殿の形式は両子寺と同様、禅宗様の影響を受けている。柱の粽や台輪がその代表である。組物はややおとなしく、出三斗に拳鼻をつけたもので尾垂木は使っていない。軒は二軒、平行疎垂木。拳鼻の絵様も両子寺本殿とよく似ており、18世紀以降の造替であろう。

３．中国及び周辺地域の石窟寺院と木造建築

３-１　中国の石窟寺院と木造建築

（１）石窟寺院の源流と展開 －インドから中国へ

石窟寺院は前４～３世紀のインドに起源した。現存する最古の遺構はビハール州バラーバル丘およびナーガールジュニー丘にある石窟で、年代は前３～２世紀という。その後、石窟寺院はスリランカ、アフガニスタン、中国に伝播していった。中国における最古の遺構は、新疆ウィグル自治区クチャのキジル千仏洞で、３世紀に開削され９世紀まで存続した。キジルに代表される西域の千仏洞の場合、中国建築の影響を読み取れないが、華北の石窟寺院では、石窟の前面に木造建築を複合させるのが一般的である。また、石窟の内部には平三斗や人字形中備など木造建築デザイン要素をレリーフとして彩色しており、外側の木造建築と石窟内部の意匠を統一させている。以下、調査した石窟寺院における木造建築の様相についてレポートする。

（２）山西省の石窟寺院と懸造仏堂

雲岡石窟（大同）　中国三大石窟の一つで、2001年、世界文化遺産に登録された。北魏の文成帝の時代、興安２年（453）頃から石窟の掘削が始まり、２代献文帝の時代に造営が大きく進んだが、３代孝文帝の代に洛陽に遷都してから国家的な整備は停止した。しかし、その後も私的な造寺造仏が正光年間（520～525）まで続いた[25]。

雲岡石窟が掘られている断崖は砂岩で、比較的軟らかく、岩脈が水平に走っているので岩窟の開削が容易だったため、仏堂はほとんどが大規模なものである。石窟の空間構成をみると、層塔を窟の中央に配したものが、第１窟・第２窟にみられる。これは仏舎利崇拝という信仰上の意味だけで塔を重視しているのではなく、石窟を支える構造材の役割を塔に期待したものという。木造密檐

図21　文殊仙寺「奥の院」文殊堂（六郷満山）

図22　入母屋屋根と絶壁の複合部分（文殊堂）

式の層塔を模した平三斗や人字形中備が石造塔の細部に鮮明に表現されている。そのほかの石窟は、前室を設けて窟を前後二室構成としており、さらに奥の後室に方柱を残してその四面に仏像のレリーフを彫るか、まったく独立した大石仏を安置している。それらの壁面にはやはり原寸大の建築細部が彫られており、北魏時代の木造建築様式を知るうえで必要不可欠な資料になっている。

史書によれば、雲岡石窟には木造の堂宇が軒を連ねていたとあり[26]、かつて、すべての石窟の正面に木造建築の礼堂を設けていたと言われる。しかし、今では、第５窟・第６窟の清代木造楼閣が残るのみとなった（図23）。高さ約14mの「露天の大仏」が鎮座する第20窟の場合、大仏を覆っていた石窟の前面の大庇が千年ばかり前に崩壊してしまったという。「露天の大仏」周辺もそうであるが、石窟が掘られている断崖に目をやると、その壁面には一列に規則正しく並ぶ方形の窪みがいくつもみられる。これらは木造前室の構造材を差し込んだホゾ穴と思われる。

第５窟・第６窟の清代木造楼閣は間口３間の平入入母屋造で、規模に３層と４層の違いがあるものの、いずれも棟を岩壁に密着させている。内部を観察すると、岩壁に方形の窪みを穿ち、梁を差し込んで軸組を安定させている。この楼閣が前室、石仏を祀る石窟が内陣にあたり、日本の平安時代仏堂にみる「内陣礼堂造」と同類の空間構成であることが分かる。

天龍山石窟（太原）　天龍山の東西両峰の間にある全国重要文物保護単位の石窟寺院。『晋祠』（2007年）によれば、天龍山石窟の始まりは今からおよそ1500年前の東魏（534～550）まで遡る。東魏の丞相、高槻は避暑宮として聖寿寺を造営し、石窟の開削も始めた。天龍山石窟は雲岡の100年後から掘削されだしたことになる。石窟の開口部には人字形斗栱や八角柱など木造建築の要素が石造りで表現されている（図24）。また、多くの石窟の外側に垂木や桁材などの差し込み痕跡とみられるホゾ穴が数多くみられる。雲岡と同じように、それらはしばしば石造の人字形斗栱や八角柱などと複合しており、石窟の前面に窟檐があったと思われる。なお、1986年の再建ながら、第9窟前面には「漫山閣」という木造三層四重入母屋造の楼閣が建っている（図25）。北漢時代に「弥勒大閣」という名の楼閣があり、明正徳初年（1505）に

図23　雲岡石窟第5窟・6窟

図24　天竜山石窟にみる人字形斗栱

図25　天竜山石窟第10窟（左）と漫山閣（右）

図26　懸空寺全景

図27　麦積山石窟

図28　麦積山石窟の壁面に穿たれた痕跡群

「漫山閣」に建て替えられたという。中に入ると４体の巨大な仏像が出迎え、上層には坐像の弥勒菩薩像、下層正面は十一面観音菩薩、左は獅子に騎乗した文殊菩薩、右は象に騎乗した普賢菩薩が立ち並んでいる。上層の弥勒菩薩は坐像でありながら、約８メートルの大きさで、さらに下層の十一面観音菩薩は約8.8メートルにもなる。このように天龍山では二重の石仏を大きな木造の楼閣で覆う建築の存在を確認した。

懸空寺（渾源）　懸空寺は北魏後期に創建されたが、何度か修復・拡張されており、現存建物は清代以降のもので、三仏寺投入堂によく似た懸造建築として知られる（図26）。複数の楼閣が板を並べただけの狭い通路で繋がっていて、縁の下の細い柱で支えられている。それら多くの細柱は荷重を支持する機能を果たしていない。階ごとに岩壁に差し込まれた梁によって上屋の荷重を支え、バランスをとっているという。

懸空寺は「三教合一」の寺院である。仏教・道教・儒教を一体化した寺院で、一番高いところにある三教殿に釈迦、老子、孔子の像を安置している。北魏は仏教の最隆盛期であり、当初は仏教寺院であったものが、後に他の宗教が付加されていったと考えられよう。三仏寺投入堂によく似ている懸造建築ということで、懸空寺を訪れたわけだが、投入堂の場合、木造建築が岩陰におさまっているのに対して、懸空寺には岩窟や岩陰に相当する部分はない。崖を掘削しているのは、仏堂背面の通風道のところだけである。したがって、岩窟と懸造には必ずしも複合性がないと判断できよう。雲岡石窟と懸空寺はともに北魏時代に造営が始まったものであり、少なくとも中国華北においては、石窟と懸造の寺院に前後関係がないのかもしれない。

（３）甘粛省の石窟寺院と窟檐

麦積山石窟（天水）　麦積山は一山丸ごと石窟寺院である。雲岡・龍門・敦煌莫高窟とあわせて「中国四大石窟」と呼ばれる所以であろう。絶壁に200余りの石窟が掘り込まれており、その姿は圧巻というほかない（図27）。麦積山石窟の開削は後秦から始まって北魏、西魏、北周、隋、唐に至る。唐代の大地震によって窟檐の大半が崩落してしまったため、その後は新たな石窟は開削されず、五代、宋、元、明、清と補修作業がおこなわれてきた[27]。崩落箇所はモルタルで窟檐の痕跡ごとパッキングしている。

現在は絶壁にコンクリートの桟道（デッキ）がついており、石造の人字形斗栱や八角柱などの装飾、窟檐の痕跡を確認できる。岩窟上部の壁面には寄棟屋根の形状が彫り込まれており、棟飾に鴟吻（しふん）がみられる。さらにその上部に、方形の大きなホゾ穴が等間隔で一直線上に並んでおり、窟檐の痕跡と推定される（図28）。石仏や彫刻を大きな窟檐で保護していたのであろう。麦積山石窟の場合、方形の大きなホゾ穴すべてが窟檐と言うわけではなく、いくつかは桟道の床根太の痕跡であろうと思われる。現存する窟檐はなく、痕跡から木造建築の姿を想像するしかない。コンクリート桟道が付く以前の麦積山石窟の写真[28]をみると、木造桟道の上に軒を連ねる木造窟檐がみられる。撮影年代は不明であるが、間口は三間で奥行は一間程度。片流れの屋根が覆う。もちろん唐代の地震で崩れた窟檐ではないけれども、絶壁の石窟においても木造の窟檐があった事実と、その痕跡を実際に確認できる。

仙人崖と宝蓋山（天水）　麦積山石窟の近くに仙人崖という渓谷がある。仙人崖は宝蓋山を中心にひろがっており、文字通り仙人が住む渓と伝承される。山道をしばらく登ると、岩陰下の平坦面にずらりと堂宇が並んでいる（図29）。それらは懸空寺と同じく、仏教・道教・儒教の混合した寺院群であり、東庵と西庵に分かれてい

図29　仙人崖「東庵」

図30　宝蓋山にみる痕跡群

図31　敦煌莫高窟宋代窟檐（第437窟）

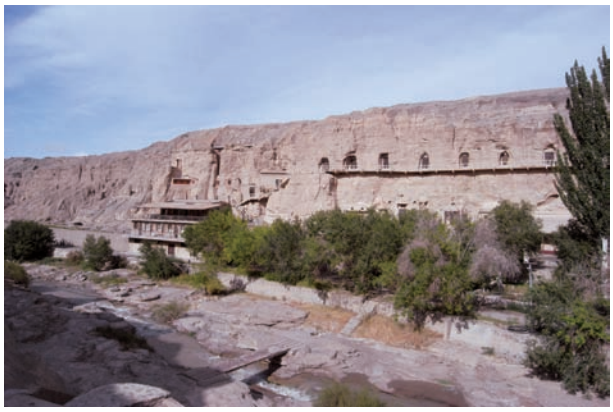

図32　敦煌楡林窟全景

る。岩陰と建築が複合する様は、スリランカのダンブッラ石窟に似ている。岩陰はリーゼントヘアーのように著しく前方に迫り出している。堂宇が建つ地盤となる岩盤と岩陰は一体になって、なだらかに続く。現在の堂宇は文化大革命による破壊後の再建で、基壇を構えた礎石建てであるが、岩盤には柱穴の痕跡が数多く残っており、当初は柱が岩盤上のピットに落とし込まれていたと推定され、一部は懸造であった可能性も想定されよう。その状況は摩尼寺「奥の院」遺跡の下層遺構面ともよく似ている。文化大革命で前身建物が破壊されてしまったことが悔やまれてならない。なお、現存する堂宇は礼堂ではなく、本尊を安置する本堂にあたる施設ばかりである。

山道の終着地には、麦積山を縮小したようにみえる宝蓋山があり、絶壁には塑像や無数の仏龕が残り、それらを覆うような窟檐の痕跡がみとめられる（図30）。宝蓋山の開削年代は北魏で、宋、元、明に再建された。仏龕の形状が麦積山とほぼ同じであり、麦積山と宝蓋山は互いに意識して計画された可能性が高いであろう。

敦煌莫高窟　世界複合遺産として知られる敦煌莫高窟は、前秦の366年に開削され、以来、歴代の王朝によって支配されるものの、絶え間なく開削と修復が続いた[29]。現在確認されている石窟の数は700を超える。莫高窟には唐・宋代の窟檐が現存している。莫高窟の窟檐は、中国に現存する木造建築として山西の南禅寺大殿、仏光寺大殿に次いで古いものであり、中国の古代建築を研究する上で不可避の資料になっている[30]。窟檐は第196、427、431、437、444窟の前方に付加しており、第196窟の窟檐が晩唐、他の４窟は宋代のものである。2010年９月に宋代の４つの窟檐を確認した。基本的に規模や意匠に大差はみられない。本稿では第437窟と第444窟の窟檐について記しておく（図31）。間口はともに３間。土台建で八角柱とも思えるほどの大面取りの柱の頂部に頭貫を通す。組物は第437窟の窟檐が三手先で、第444窟の窟檐は二手先である。肘木には水繰りがみられる。軒は地円飛角の二軒で、第437窟窟檐は隅のみ扇垂木としている。敦煌石窟の石質は非常にもろく、石造の窟檐を彫るにはむいていないため、窟檐のほとんどが木造になったと言われている[31]。

敦煌楡林窟　甘粛は中国で石窟寺院がもっとも多く存する省であり、敦煌周辺にも点在している。わけても

図33　石窟庵に付随する木造建築（1961再建）

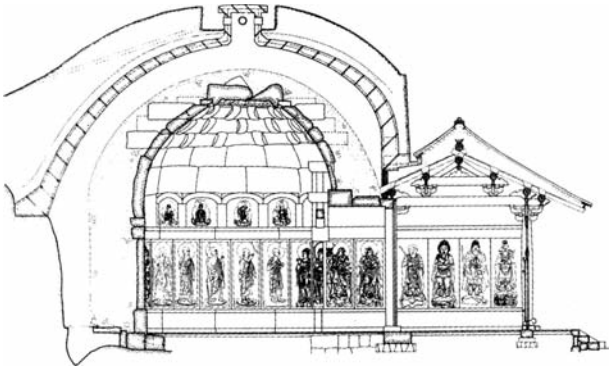

図34　石窟庵断面図［金2008］より転載

安西県の楡林窟は有名である。標高1700mの砂漠台地を切り裂く楡林河の両岸の崖を開削した石窟（図32）に唐代以降各時期の壁画と清代の塑像が残る。石窟の数は河を挟んで東壁に32、西壁に11と多くはないが、周辺の自然と調和して壮大な景観を創り出している。窟の多くは伏斗式方窟で、内部には五代に描かれたという西方浄土と東方浄瑠璃の理想郷の壁画もあり、建築的な資料として大変興味深いものである。木造の窟檐は残っていないけれども、ホゾ穴などの痕跡は数多くみられ、なかには妻入屋根を推定させるものもあった。

3-2　統一新羅の石窟庵と岩窟型仏堂

新羅は日本海を挟んで山陰の対岸にあたり、『出雲国風土記』の「国引神話」に登場するように、古代山陰地方との文化的交流が盛んであったと推定される。石窟寺院・岩窟型仏堂と関係の深い遺構ということで、慶州の石窟庵と南山を２度訪問した（2010年２月・11月）。

（１）石窟庵

慶州の進硯洞吐含山麓に所在する石窟庵は、統一新羅の景徳王10年（751）、当時の宰相金大城によって創建された「人工の石窟寺院」である。建立当初は「石仏寺」と呼ばれていた[32]が、儒教の浸透や李氏朝鮮時代（1392～1910年）の仏教弾圧によって廃墟となり長きにわたってその存在が忘れ去られていた。日韓併合時代に発見され、まず日本が1913年に解体修理したが、その工事は必ずしも成功したとは評価されておらず、1961年に韓国政府が修復工事をおこない[33]、1995年に仏国寺とあわせて世界文化遺産に登録された。

石窟庵は八角形平面の主室が土饅頭状にもりあがり、その前方に木造方形の礼堂が附属していて、外観の全景は前方後円墳に似ている（図33）。内部に入ると、これまで見た窟堂とは異なる建築構造に驚かされる。インドや中国の石窟寺院のように、自然の岩盤を掘削するのではなく、花崗岩の切石を積み上げ、その上に土を盛っているのである（図34）。奥側をドーム状の主室とし、方形の前室と羨道がつないでいる。空間構成は、雲岡石窟や天龍山石窟と共通し、「内陣礼堂造」として捉えることができよう。ただし、現在の礼堂は後世の建築で、1961年の保存工事の際に石窟保護のために付加されたらしい。実際の礼堂は石窟内部の前室・羨道であり、僧侶は木造建築内部ではなく、石窟内部の前室で読経をおこなう。石窟庵で前室と主室を結ぶ羨道の両脇にみられる八角の石柱は、雲岡や天龍山の石窟寺院でみた正面の木造建築の表現のように思われる。石窟庵の場合、ほんらいは木造建築であるはずの礼堂までも、石材を用いて造った「石造礼堂」のようにみえる。『仏国寺と石窟庵』［朝鮮総督府編1938］によると、前室は彫像石の上に左右各四個の肘木状の石が突き出ており、当初はその上に石造か木造の屋根があったことが記されている。さらに、窟内埋土中からは多数の瓦・釘・鎹等が発見されたとあり、石窟の前面には木造の屋根と入口があったとみている[34]。前室の両壁面は石積みで、屋根構造と正面の壁が木造建築であった可能性があるだろう。

（２）慶州南山の岩窟型仏堂

慶州は、およそ千年間新羅王朝の都として栄えた。三国時代（前57年～676年）から統一新羅時代（676～935年）の古墳や仏教関連の遺跡が多数残っており、「慶州歴史地域」として世界文化遺産に登録されている。南山は市街地から南に４キロの位置にあり、標高468mの丘陵状の山嶺は南北８キロ、東西４キロに及ぶ。新羅文化の中心を成す霊山で「慶州歴史地域」の一部をなし、全域に数多くの磨崖仏や寺院跡が散在している[35]。以下は2010年11月に略測した遺構のレポートである。

仏谷龕室石仏坐像　　南山の北口から入山して20分の

図35　慶州南山 仏谷龕室石仏坐像（7世紀前半）

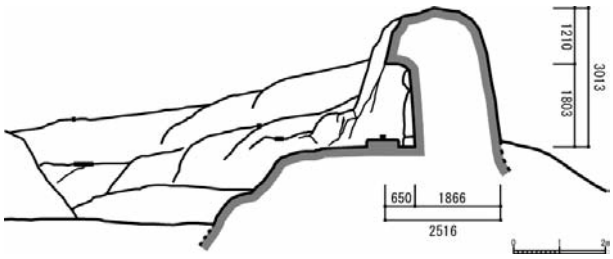

図36　慶州南山 仏谷龕室石仏坐像断面図（2010年実測）

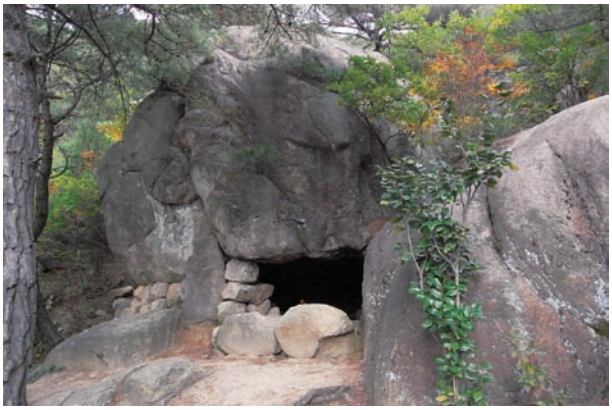

図37　慶州南山 石造如来坐像脇の岩窟

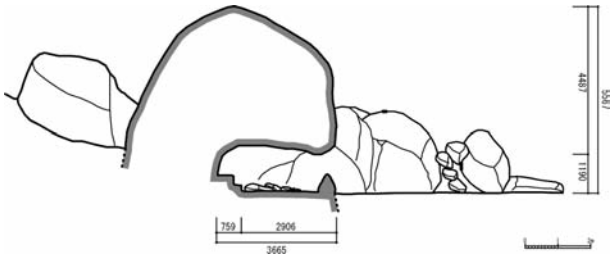

図38　慶州南山 石造如来坐像脇の岩窟断面図（2010年実測）

ところにある。あきらかに自然石をくりぬいた小さな岩窟型仏堂で、その名のとおり、「仏龕」あるいは「石造の厨子」のような趣きがある（図35）。仏谷龕室石仏坐像は７世紀前半の作であり、山肌から露出した花崗岩の突出部に穿たれたものである（図36）。岩窟内の石仏は磨崖仏になっており、岩窟と石仏が一体化している。また、岩肌（岩盤）と地面が接するところに礎石のような平石とその痕跡が左右２ヵ所にみられ、ここに覆屋の存したことが推定される。岩盤上にピットはみられないが、当初は岩窟と木造建築が複合していたことを想像できる。それが岩窟までも覆う仏堂だったのか、礼拝する礼堂だけのものだったのかは定かではないが、前方に木造建築をともなう岩窟型仏堂が朝鮮半島に実在した可能性を裏付ける遺構と言えよう。

石造如来坐像と岩窟仏堂　石造如来坐像は８世紀後半～９世紀前半の作。最近整備されたようで真新しい基壇の上に石造如来坐像が鎮座している。石仏の左奥に岩窟を含む巨岩がある（図37）。この岩窟は、巨岩の岩陰を利用しその左右に石積みをして形を成したもの。中に仏像等は祭られていないが、奥にベッド状の祭壇を配する（図38）。祭壇には蝋燭が灯っており、岩窟内を照らしていた。正面から石仏の基壇をみると、石仏は参道の延長線上にはなく、岩窟へとのびている。参道は岩盤を荒削りしたもので古い時代のものと思わる。基壇は新しいものだから石仏の位置は当初位置から動いているかもしれないが、上の軸線を重視するならば、新しい基壇上に立つ石仏ではなく、軸線上の岩窟を中心にしていた可能性があるだろう。

石造如来坐像近くの岩陰仏堂　石造如来坐像（８世紀中葉）の先に、道を挟んで左側に巨岩がある。岩の下にはガラスケースが置かれている（図39･40）。この巨岩は先ほどの岩窟とは異なり、岩陰の両脇に石積みをしていない開放的な仏堂である。この仏堂に関する説明はなく、地図上にも示されていないため名称や年代は不明。ガラスケースの中には大量の蝋燭に火が灯っており、仏像の姿はない。後世のものと推定される外側の祭壇にはセメントが敷かれているのだが、セメントには土台の痕跡が残っており、岩陰に窟檐らしき木造建築があったと想像できる。また、岩陰の横の岩壁には瓦が付着しており、木造建築の屋根の残骸とも推定される。

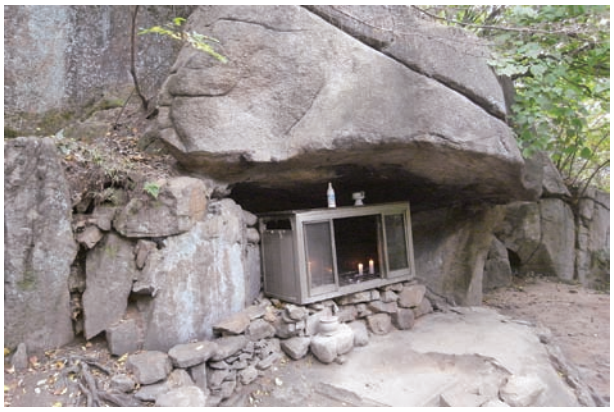

図39　慶州南山 石造如来坐像先の岩陰

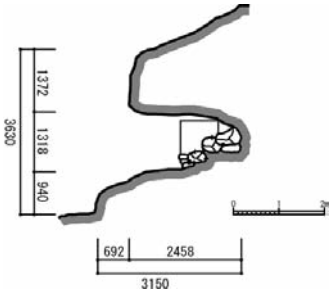

図40　慶州南山 石造如来坐像先の岩陰断面図（2010年実測）

4 まとめ

4－1　岩窟・岩陰型仏堂の類型再考

（1）大給類型論の増補改訂

以上の調査成果から、大給友樹の類型（2009年度１月末卒業論文）を修正した新しい分類を以下に示す。

Ａ型：岩窟単独内陣型

Ｂ型：岩窟・懸造複合型

Ｂ－１型：懸造礼堂型

B-1a 型：　懸造＝窟檐型

B-1b 型：　懸造＝向拝礼堂型

Ｂ－２型：懸造内陣型

B-2a 型：　懸造＝入母屋造礼堂型

B-2b 型：　岩窟内本堂型

B-2c 型：　岩陰内本堂（本殿）型

Ｃ型：絶壁懸造型

以上のうち、用語を若干修正しているものの、Ａ型とＣ型は大給の定義とほぼ変わらない。Ａ型は「小さな岩窟に仏像を安置し、正面に懸造を（現在）伴わない」タイプである。一方、大給はＣ型を「絶壁に建つ懸造」と定義し、その典型例に三仏寺投入をあげているが、今回はより厳密に「岩窟・岩陰のない絶壁に建つ懸造」と定義しなおした。この結果、三仏寺投入堂は、凝灰岩層と玄武岩層の境にできた岩陰に立地しているので、Ｃ型ではなく、B-2c 型とみなした。この定義の変更を反映すべく、「懸造単独内陣型」という大給の呼称を「絶壁懸造型」に改めた。本稿で紹介した事例のうち、純然たるＣ型は中国山西省渾源の懸空寺のみとなる。以下、細かく下位類型を設定したＢ型について説明する。

（2）Ｂ型の定義と実例

Ｂ－１型（懸造礼堂型）は「岩窟と複合する懸造建築を礼堂として機能させている」タイプである。この場合、岩窟が仏像の鎮座する内陣となる。これに対して、Ｂ－２型（懸造内陣型）は「岩窟の内部に仏堂をおさめてしまう」タイプであり、仏像は懸造建築の奥に安置する。両者の中間にあたる懸造内陣・礼堂融合型は、「絶壁に穿たれた岩窟の正面に懸造建築を設けて複合し、その内部を礼堂兼内陣とするが、岩窟にも仏像等を祀る」タイプと定義する。以下、下位類型についても定義を述べた上、具体的な事例を示す。

B-1a 型（懸造＝窟檐型）　「懸造建築を窟檐のような岩窟の遮蔽装置として使う」もので、日本に中国の窟檐そのものと呼びうる事例は存在しないが、鰐淵寺蔵王堂の場合、懸造建築は窟を遮蔽する正面三間の壁・戸口とその前に附属する縁のみであり、敦煌莫高窟に代表される中国石窟寺院の窟檐と走廊の関係によく似ている。岩窟内部の空間は一室で床板を張らず、土間としていないので、礼堂にあたる領域はむしろ縁（走廊）と言えるであろう。鰐淵寺蔵王堂にみられるこの特徴は、堂の前方を流れ落ちる滝水を避けるためとみるのが常識的であり、ただちに中国石窟と関係づけられるわけではない。

B-1b 型（懸造＝向拝礼堂型）　「向拝のような片流れ屋根の懸造式礼堂を岩窟の正面に設ける」もので、宇佐市の清浄山龍岩寺の礼堂（鎌倉時代）がこの類型にあたる。それは、中国石窟寺院の窟檐が巨大化し、縁（走廊）が奥行をひろげて礼堂に発展したもののようにもみえる。六郷満山の「奥の院」には、小祠・小社の正面に片流れ屋根の庇を付設するものもあり、岩窟型仏堂に複合する懸造建築の初源的な姿を示すものと推定している。

B-2a 型（懸造＝入母屋造礼堂型）　「比較的大きな入母屋造懸造の礼堂を岩窟と密着させて正面に設けるが、礼堂と岩窟の両方に仏像を安置する」ものと定義する。六郷満山の両子寺本殿では平入入母屋造、文殊仙寺では妻入入母屋造の懸造堂宇を岩窟と複合させている。平入と妻入で形式は異なるけれども、いずれも木造の堂

図41　甘露寺（福建省 泰寧）

図42『因幡民談記』にみる摩尼寺「奥の院」の絵図

宇を半裁した状態で崖に密着させている。岩窟の内部に木部がくいこんでいて、その正面奥に本尊を祭る。つまり、木部のみで、内陣と礼堂の機能をあわせもっているのだが、両子寺の場合、木造建築の両脇に岩窟に入る通路を設ており、岩窟の奥部に観音、八幡神、仁聞菩薩、両子大権現を祀る。文殊仙寺文殊堂（本殿）も、岩窟にほぼ接しているが、岩窟奥に祭場はない。その代わりに本殿脇に役行者像の鎮座する小型の岩窟を設けている。雲岡石窟第5・6窟ほど明瞭に「岩窟＝内陣／木造建築＝礼堂」という区分けが明瞭になされているわけではないけれども、岩窟と木造建築の複合構造という点では、B-2a 型が華北の石窟寺院に最も近いと言えよう。

B-2b 型（岩窟内本堂型）　「岩窟内に独立した懸造建築を設ける」もので、不動院岩屋堂（鳥取県若桜町）と焼火神社本殿（旧焼火山雲上寺）に代表される。華北の石窟寺院にはまったくみられない形式であり、日本独自の岩窟型仏堂と呼びたいところだが、2010年２月25日に不動院岩屋堂を視察された楊鴻勛先生（中国建築史学会理事長）から「福建省泰寧の甘露寺が不動院岩屋堂とよく似た中国建築だ」とご教示いただいた。筆者らは甘露寺を訪問した経験はないけれども、インターネットで複数の画像を検索すると、たしかに岩窟の内部に懸造の仏堂が建っている。甘露寺は南宋の紹興16年（1148）の開基で、いくつかのサイトは建築もその年代としているが、画像をみる限り、現存建築の年代は明代以降に下るのではないか、と思われる（図41）。それにしても、福建省と山陰地方に B-2b 型の懸造式岩窟型仏堂が存することには注目すべきであり、この類型は華北の石窟寺院ではなく、長江以南の懸造建築との相関性を想定しておくべきかもしれない。

B-2c 型（岩陰内本堂・本殿型）　「岩窟内に独立した懸造建築を設ける」ものであり、三仏投入堂がその代表である。豊後高田市の今熊野山胎蔵寺「奥の院」熊野神社本殿もこの類例にあたる。熊野神社本殿は三間社流造背面側の軒が岩陰にくい込んでいる。岩陰と接する部分に空きスペースが少ないため、背面側の屋根が短い流造の構法は理に叶っている。神社でもないのに、三仏寺投入堂の蔵王堂が流造にしているのはこの理由によるのだろう。このほか、岩陰に本殿が立地する神社は少なくない。不動院岩屋堂直下の岩陰に本殿を構える岩屋神社（若桜町）、「壇鏡の滝」脇の岩窟下に本殿・拝殿をおく壇鏡神社（隠岐道後）がこのタイプであり、さらに鳥取市福部町の坂谷神社本殿や鰐淵寺近くの韓竈（からかま）神社本殿（出雲市唐川）も巨岩の岩陰に立地している。一方、中国でも、天水市「仙人崖」の広大な岩陰の下に仏教・道教・儒教の混合した堂宇が軒を連ねる。

（３）上記類型論からみた千寿院窟堂跡と摩尼寺「奥の院」遺跡

千手院窟堂跡の近辺の地表面で確認した礎石と『因幡誌』（1795）所載の絵図を対照し、江戸時代における窟堂の復原 CG を制作した。絵図や CG にみるとおり、外観上は B-2b 型（岩窟内本堂型）に分類できるが、千手観音の安置場所が不明な点に憾みがある。千手観音が堂内に鎮座していたとすれば B-2b 型と断言できるのだが、岩窟の奥にそれが安置されていたとすれば、むしろ B-2a 型（懸造＝入母屋造礼堂型）に分類すべきであろう。現段階では「B-2a 型か B-2b 型のどちらか」と判断するにとどまる。

一方、摩尼寺「奥の院」遺跡では、初重の岩陰に多数の石仏と木彫仏、二重にあたる上方の岩窟に五輪塔を祀っており、その前方の加工段（平坦面）に上層の礎石が数多く残っている。『因幡民談記』（1688）に描かれた「奥の院」の２棟の大型堂宇（図42）のうち、手前の楼造が加工段で検出した上層遺構（室町時代初期～江戸時

代前半）にあたり、後方の二重入母屋造風建物が人工的に掘削された岩陰・岩窟仏堂に密着して建てられたものと推定される（図43）。実際、岩陰の真下で掘立柱穴を検出している。後者の場合、岩窟・岩陰に祭祀対象があり、外側に二階建の礼堂が存在したと考えられるので、上記類型論のB-2a型（懸造＝入母屋造礼堂型）に分類されよう。B-2a型の六郷満山両子寺本殿、文殊仙寺が平屋の入母屋懸造堂宇を岩窟と複合させているのに対して、摩尼寺「奥の院」遺跡では二重の入母屋造が岩窟・岩陰と複合しているわけで、全体の外観はいっそう雲岡石窟第５・６窟に近くなっている。なお、下層遺構（平安時代後期～）に関しては、下層岩盤上に複数のピットと、その近隣１ヶ所で掘立柱穴を検出したにすぎないが、現段階では、B-1a型（懸造＝窟檐型）もしくはB-1b型（懸造＝向拝礼堂型）のような片流れの差し掛け庇を支えた柱の痕跡ではないか、と推定している（図44）。

４-２　山陰と大分の比較

（１）岩屋と掛屋

六郷満山および周辺諸寺院の「奥の院」を駆けめぐりながら、岩屋（いわや）と掛屋（かけや）という用語が対比的に使われていることを知った。「いわや」という概念は山陰でも常用されている。絶壁に掘り込んだ横穴を仏堂とする場合、その全体を「いわや」と呼ぶわけだ。一方、「かけや」という言葉については、山陰地方で寡聞にして知らないけれども、それが懸造の建物をさすのはあきらかであろう。「いわや」と「かけや」はそれぞれ独立した概念というよりも、複合的に意識されたものである。「いわや」を掘って仏像を祀る場合、正面に「かけや」をつくって風雨を避け、そのなかで人びとは礼拝する。それが大分の山岳寺院「奥の院」ではあたりまえになっている。山陰ではすでに遺跡化した「奥の院」が少なくないから、「岩屋の前には掛屋があったのだろう」という推定の域をでないのに対して、大分では「岩屋の前には掛屋があった」と言い切ってよいのである。

さて、大分と山陰で決定的に異なるのは、磨崖仏の存否である。大分の場合、仏龕のように浅い岩窟に仏を浮き彫りにしており、それを庇護し礼拝するための「かけや」を「いわや」の前に設ける。眞田廣幸氏のご教示によると、三徳山の美徳谷で線刻の磨崖仏がごく最近発見されたというが、前室の存否については不明であり、他の山陰の霊山では報告がない。山陰の場合、不動院岩屋堂や焼火神社のように大きな岩窟を掘って、そのなかに懸造の仏堂をまるごと納めるB-2b型（窟内本堂型）・B-2c型（岩陰内本堂）型が主流を占める。いまに残る山陰の懸造は「仏堂」としての独立性が強く、唯一の類例（福建省甘露寺）ではあるけれども、中国南方地域の岩窟・懸造仏堂との相関性がみとめられたのに対して、大分の懸造は「いわや」の前室あるいは礼堂としての性格を有するB-1b型（懸造＝向拝礼堂型）やB-2a型（懸造＝入母屋造礼堂型）が少なくなく、磨崖仏との複合性をも考えあわせると、華北や朝鮮半島との親近性を感じさせる。

（２）草堂から伽藍へ

次に年代の問題である。大分の古い磨崖仏の制作年代は平安後期～鎌倉前期であるという。そのほとんどが天台宗と係わりをもつようだが、大分で訪れた寺院に円仁開山伝承はみられなかった。山陰の有力寺院には円仁伝承があるけれども、それを疑問視する意見が根強くあり、摩尼寺「奥の院」の発掘調査においても、下層遺構の造営年代は10世紀以降にくだるだろうという見通しをえている。興味深いのは、大分における磨崖仏の勃興年代と三仏寺投入堂の建築年代（1100年前後）がほぼ重なりあうことで、これをそのまま受け入れるならば、天台宗による地方山岳寺院の再整備は11～12世紀ころまでくだると考えざるをえない。

ここでどうしても避けて通れない建造物がある。豊後高田市田染の蕗（ふき）に境内を構える富貴寺もまた仁

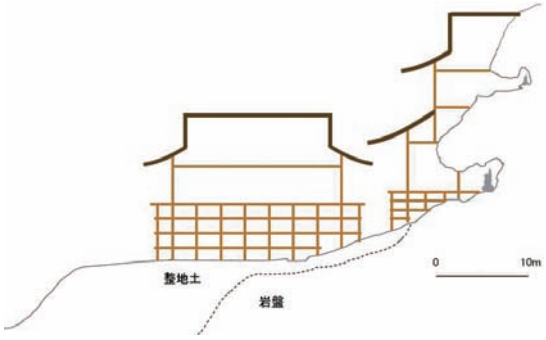

図43　摩尼寺「奥の院」岩窟・岩陰と復元建物の関係性

図44　摩尼寺「奥の院」下層遺構復元断面図

図45　富貴寺大堂（六郷満山）

図46　六郷満山天念寺講堂掛屋（草堂形式）

聞開山伝承をもち、宇佐神宮の庇護を長きにわたって受け続けた。その境内に国宝の大堂（おおどう）が建っている。宇佐八幡大宮司の到津（いとうづ）家文書によれば、大堂の建立は12世紀後半であり、様式的には平安時代後期の建築とされる。 正面３間×側面４間の小さな和様の阿弥陀堂で、九州最古の仏教建築でもある。屋根は宝形造の行基葺。阿弥陀如来を納める四天柱のみ丸柱とし、側柱はすべて面取角柱とする。

不思議に思う方も少なくないであろう。なぜ、このように小さな阿弥陀堂が「大堂」なのか。大堂の建設時期は磨崖仏の制作時期とほぼ重なり合う。天台宗によって六郷満山諸寺院が再整備された時期のモニュメントである。それ以前はどうだったのか、考古学・歴史学的な証拠はなにもないが、六郷満山及びその周辺諸山の寺院に多く残る茅葺きの草庵風仏堂や掛屋に注目すべきではないだろうか。富貴寺大堂の竣工以前、この地の本堂や講堂などの主要仏堂はおそらく掘立柱の草庵（草堂）であり、富貴寺に初めて本格的な礎石建瓦葺の本堂が建設された結果、従来の草堂に比して大きく立派だから「大堂」という尊称が与えられた可能性があるだろう。この点、民家史における「千年家」の概念との重複を感じないでもない。中世にあって、民家はなべて掘立柱の草庵であり、永続性の乏しいものであったが、地主階級の住まいに石場建（礎石建）が導入された結果、「千年家」という呼称が生まれたものと推定される。それは「千年続く家」という意味ではなく、「永続性のある家」という意味で用いられたにちがいない。

（３）周圏論的な理解は可能か

さて、「奥の院」に存在する磨崖仏や加工段の出現が平安後期以降にくだるにしても、仏寺としての開山伝承は７～８世紀まで遡る。摩尼寺「奥の院」の場合、加工段の下層が円仁の時代（９世紀）まで遡る可能性は低いけれども、７・８世紀の土器が複数出土しており、奈良時代以前に人びとの活動があった可能性は否定できない。比叡山延暦寺においてすら、最澄開山寺における主要堂宇が「草庵」であったことを斟酌するならば、平安後期以前の山陰や大分の山嶺に存在した堂宇もまた「草庵」風にイメージされなければならないであろう。そして、六郷満山における草庵風仏堂の一類型として、磨崖仏のない「いわや」の正面に単純な「かけや」を付設したものも想定すべきと考えている。

これと関連して、七瀬川右岸の大分市加羅に所在する高瀬石仏の「一根三茎仏」を興味深く捉えている。高瀬石仏は数少ない石窟形式の磨崖仏であり、高さ1.8m、幅4.4m、奥行1.5mの小さな石窟のなかに５つの石仏を彫りだす。平安後期（12世紀後半）の作と推定されている。石窟手前の崖面には小さな龕があり、１本の蓮の茎から三つに枝分かれした蓮華の上に阿弥陀三尊仏の安座する姿が浮き彫りされている。こうした「一根三茎仏」は白鳳時代（７世紀後半）に盛んに造形されたが、大分では平安後期まで継承されていたことがわかる。近畿の白鳳時代の流行 －それはもちろん唐（618-917）からの直接もしくは間接の影響によって生まれた文化である－が、中国では宋の時代（960-1279）にあたる平安時代の中期以降になって、地方で華開いたという見方ができるのか否か。

ここで思い起こされるのは、北斉（550-577）の天龍山石窟第16窟にみられる人字形割束（図24）の様式論である。法隆寺金堂の勾欄腰組中備に用いられる人字形割束の形状が天龍山第16窟のそれと酷似することから、法隆寺再建非再建論争において非再建説の有力な様式的証拠とされてきたが、近年の発掘調査で再建説が決定的に

なった。再建された現法隆寺金堂の竣工年代は和銅の平城遷都直前のころとされるので、ほぼ同じ形状の割束が華北で出現し日本で採用されるまで、じつに２世紀半の時間が必要だったことが分かる。まるで、柳田國男の周圏論を裏付けるようなデータの典型例だが、高瀬石仏の「一根三茎仏」もまた周圏論的な理解が可能かどうか、検証する必要があるだろう。すなわち、磨崖仏が大分で彫られたころの中国（宋）では、石窟寺院はすでに流行遅れになってしまっていた。南北朝から初唐にかけて隆盛した石窟寺院の諸要素（岩窟・磨崖仏・掛屋など）が、数百年ばかり後の日本の辺境山嶺地域で矮小化し日本化しながら開花したのであろうか。これを否定する見解もあるだろうが､華北の石窟寺院は宋代まで存続しており、平安時代の日本に影響を与えなかったと決めつけることもまた危険であろう。

統一新羅の「石窟庵」について、石窟寺院を開削できない新羅王朝が石窟寺院を憧憬して制作した「人工の石窟寺院」であろうという見方をすでに示した。南山の磨崖仏や岩窟型仏堂のなかにもその時代に遡る遺構があるだろう。しかしながら、新羅王朝経由で、日本に岩窟型仏堂が伝わったとは未だ断じ難い。そもそも、岩窟や岩陰の開削年代がよく分かっていないし、新羅側の岩窟型仏堂における木造建築との複合形態が明瞭ではない。

再び摩尼寺「奥の院」遺跡を参照するならば、岩窟や岩陰は自然のものではなく、壁面に粗い加工痕跡を残すばかりか、下層の分厚い整地層には多量の凝灰岩片・粉を含んでいる。要するに、岩窟・岩陰の掘削年代と下層加工段の形成時期は同期の可能性があり、早くとも10世紀、遅ければ12世紀以降の整備と考えざるをえないのである。現状では、日本における「雑密」的行場の出現が８世紀以前に遡るにしても、岩窟・岩陰仏堂の形成期は平安時代後半以降に下る可能性が高く、それは唐や統一新羅時代からはるかに遅れている。岩窟仏堂や磨崖仏などの出現と、その淵源と言うべき中国大陸の造寺活動の相関性を如何に解釈するのかが、今後に残された最大の課題と言えるであろう。

４-３　東南アジアの洞窟寺院をめぐって

2011年夏に訪れたミャンマーとラオスでは、洞窟寺院を視察した。ラオスにおける統一国家の始まりは1353年に建国されたラーンサーン王朝で、その王都が世界文化遺産の町「ルアンプラバン」である。国家形成以前のラオスは、ムアンと呼ばれる部族社会が対立する内戦状態にあった。群雄割拠の諸国を統一したファーグム王は、大乗仏教をラーンサーン王国運営の基軸となる制度として導入した。14世紀にスリランカからカンボジアを経由して上座部仏教が導入されたころ、ラオスはなお内戦が激しい状態にあり、王はメコン川沿いのバークゥ洞窟に僧・経典・仏像などをまとめて隠し保護した。ここにラオス最初の寺院が誕生したわけで、ラオスにおける仏教寺院の起源は「洞窟寺院」だと言うことができる。

ルアンプラバンの街から船でメコン川を25㎞遡上すると、バークゥ洞窟に至る。そこには上下２層の鍾乳洞があり、あわせて4000体の仏像が祀られている。下層洞窟は浅く、石窟寺院に似た趣きがある。一方、数十メートル上にある上層の洞窟は奥深い鍾乳洞をインド様式のゲートで塞いでいる。洞窟内の暗闇の通路に小型のパゴダや仏像が安置されている。一方、インドと国境を接し、紀元前後から仏教の浸透したミャンマーでは、仏教寺院の中心はあくまでパゴダ（仏塔）であり、洞窟は「道場」的な位置づけがなされている。シャン州ヘイホー市の郊外山間部にあるガンドイワテ村の洞窟寺院は、複雑に枝分かれする洞窟の一部を掘削して明かりとり（天窓）や小室を設けているが、パゴダや僧坊は洞窟の外に配されている（最近新築されたパゴダは洞窟内の入口近くにあった）。洞窟はあくまで瞑想するための修行場であって､パゴダや仏像を祀る場ではない｡スリランカではシーギリア・ロックなどの岩山の岩陰もまた古代の瞑想修行の場として知られている。

岩窟型仏堂のうち素朴なＡ型やB-1a 型、B-1b 型は仏龕が大きくなった装置のようにもみえる。こういう見方に従えば、石窟寺院もまた巨大化した仏龕として捉えられなくもない。それは一つの見方である。一方、洞窟や岩陰のような自然地形との相関性も無視できない。黄泉の国（冥界）へとつながるようなイメージをもつ洞窟、あるいは巨岩が倒れ込みそうな危険な匂いのする岩陰は、その「場所」自体に神秘性がある。当初は修行場として利用された洞窟や岩陰が、後に仏塔や仏像を祀る祭場へと変化していった可能性があるだろう。こういった奇抜な自然地形を利用した仏堂が原型としてあったとすれば、石窟寺院や岩窟型仏堂を「人工の洞窟」あるいは「人工の岩陰」と解釈する見方も成立しないわけではなかろう。これはまた別の見方である。

残念ながら、今の段階でわたしたちは結論を下せるだけの情報をもちあわせていない。今後とも、上のような見方を多面的に展開させながら、アジア全域の石窟寺院と岩窟型仏堂を視野に納め、木造建築との係わりという課題に焦点を絞りながら、考察を深めていきたいと思っている。

図47　クムトラ千仏洞（新疆ウィグル族自治区 クチャ市）

【附記】　本稿は2009年度鳥取県環境学術研究費助成研究「文化的景観の解釈と応用による地域保全手法の検討 －伝統的建造物群および史跡・名勝・天然記念物との相補性をめぐって－（Ⅱ）」（課題番号 B0807、研究代表者・浅川）、2010～2012年度科学研究費補助金（基盤研究Ｃ「石窟寺院への憧憬 ―岩窟／絶壁型仏堂の類型と源流に関する比較研究」（課題番号22560650、研究代表者・浅川）、2011年度鳥取県環境学術研究費助成研究「摩尼寺奥の院遺跡の環境考古学的研究」（課題番号B1103、研究代表者・浅川滋男）の成果の一部をなすものである。以上の共同研究者である今城愛、清水拓生、岡野泰之、嶋田喜朗、大給友樹、大森祥平、竹内信之、吉川友実、檜尾恵、眞田廣幸の各氏に感謝申し上げる。

さて、紀要原稿の〆切に前後する2011年11月中旬、浅川・清水・檜尾・眞田の４名は中国新疆ウィグル自治区のクチャ市を訪問し、キジル千仏洞（３～９世紀）、ギジル・ガハ千仏洞（４～11世紀）、クムトラ千仏洞（６～11世紀）、スパシ仏教寺院址（３～９世紀）を視察した。キジル千仏洞は中国最古の石窟寺院、スパシ仏教寺院は玄奘が滞在した寺院としてよく知られている。クチャの古代石窟寺院は、内陣を本尊の鎮座する主室と涅槃仏をおく後室に分け、主室の前方に前室を配する。砂礫層を開削してできた石窟寺院のため、どの遺跡も風化が激しく、すでに前室を完全に残す遺構は少ないが、クムトラ千仏洞の68～72窟には５窟の正面に連続する走廊（ベランダ兼廊下）がほぼ完全に残っている（図47）。その姿から想像するに、三国時代～唐代のクチャ周辺の石窟寺院では木造建築と呼べる部分は存在せず、木材は扉や窓などの建具に用いられたにすぎないようである。内陣・礼堂造に近い空間構成はこの時代に出現しているが、最初期の西域石窟寺院では、木造建築と石窟寺院の融合がみとめられないことが判明した。紀要〆切の時間的制約及び紙数の制約により、クチャ周辺の状況をレポートできなかったことが悔やまれる。この問題は別稿に委ねるしかない。

注

1　井口一幸（1991）『古代山人の興亡 －懸け造り堂宇の謎』彩流社、p. 391-394。同（1996）『続 古代山人の興亡 －懸け造り寺社巡礼 西日本編』彩流社 p.277-281。
2　大給友樹（2010）「石窟寺院への憧憬　－岩窟／絶壁型仏堂の類型と源流－」鳥取環境大学環境デザイン学科卒業論文、p. 11
3　大給友樹（前掲注2）2010：p. 65-67
4　今城 愛・大給友樹（2011）「石窟寺院への憧憬 －岩窟／絶壁型仏堂の類型と源流－」（鳥取環境大学建築・環境デザイン学科＆鳥取県教育委員会文化財課歴史遺産室編）『大山・隠岐・三徳山 －山岳信仰と文化的景観－』平成21・23年度鳥取県環境環境学術研究費・平成23年度科学研究費成果報告書、2011：p. 32-44
5　鳥取環境大学建築・環境デザイン学科＆鳥取県教育委員会文化財課歴史遺産室編（前掲注４）2011：p. 79-88
6　岡垣頼和（2011）「摩尼寺「奥の院」－発掘調査と復元研究－」鳥取環境大学大学院環境デザイン領域修士論文
7　大給友樹（前掲注2）2010：p. 16-17
8　不動院岩屋堂修理委員会（1957）『重要文化財不動院岩屋堂修理工事報告書』彰国社、p. 2
9　不動院岩屋堂修理委員会（前掲注８）1957：p. 8-22
10　大給友樹（前掲注２）2010：p. 17
11　大給友樹（前掲注２）2010：p. 17-18
12　安部恭庵（1981）『因幡誌』世界聖典刊行協会、p. 263
13　安部恭庵（前掲注12）1981：p. 691
14　下中 弘（1992）「摩尼寺」『日本歴史地名大系 第32巻 鳥取県の地名』平凡社、p. 207
15　野本覚成（2011）「慈覚大師円仁が残した山陰の仏教」鳥取環境大学建築・環境デザイン学科＆鳥取県教育委員会文化財課歴史遺産室編2011（前掲注５）、p. 22-31
16　岡垣頼和（前掲注６）2011：p. 31-59
17　岡垣頼和（前掲注６）2011：p. 71-90
18　浮浪山鰐淵寺（1997）『出雲國浮浪山鰐淵寺』出雲國浮浪山鰐淵寺刊行事務局、p. 3-4
19　竹内理三編（前掲注19）1979：p. 201

20　松崎照明・荒木正也（1987）「鰐淵寺蔵王堂、円蔵寺虚空蔵堂（菊光堂）、鷹栖観音堂についてⅠ－懸造建築の研究　別１－」日本建築学会大会学術講演梗概集（近畿）、p. 923
21　竹内理三編(1979)『角川日本地名大辞典　32島根県』株式会社角川書店、p. 491
22　文化財建造物保存技術協会（1999）『重要文化財焼火神社本殿・通殿・拝殿保存修理工事報告書』宗教法人焼火神社、p. 1-2
23　須川 眞編（2008）『日本の仏像 No.44　臼杵磨崖仏と国東半島』講談社、p. 21
24　須川 眞編（前掲注23）2008
25　李 雪芹・李 立芬（2006）『解読雲岡』学苑出版社、p. 15-21
26　NHK 出版班（1979）『雲岡石窟の旅』日本放送出版協会、p. 40
27　金 維諾（1988）「麦積山石窟の創建とその芸術上の成果」、天水麦積山石窟芸術研究所編『中国石窟 麦積山石窟』平凡社、p. 176-200
28　尾島俊雄(1987)『中国建築・名所案内』彰国社、p. 284
29　簫 默（1989）『敦煌建築研究』中国文物出版社, p. 26-28
30　尾島俊雄（前掲注28）1987：p. 282
31　簫 默（前掲注29）1989：p. 269
32　金 勇男（2008）『慶州』宇進文化社、p. 21
33　朝鮮総督府編（2004）『仏国寺と石窟庵』民族文化、p. 101-115
34　朝鮮総督府編（前掲注33）2004：p. 121
35　尹 京烈（1994）『古都慶州神秘中の南山』佛地社、p. 17-20

参考文献

浅川滋男編（2010）『「文化的景観」の解釈と応用による地域保全手法の検討 －伝統的建造物群保存地区および史跡・名勝・天然記念物との相補性をめぐって－』平成20～21年度鳥取環境学術研究費成果報告書
浅川滋男編（2010）『文化的景観としての水上集落論－世界自然遺産ハロン湾の地理情報と居住動態の分析－』平成19～21年度科学研究費挑戦的萌芽研究成果報告書
王 書慶・杜闘城編（2005）『敦煌とシルクロード』海天出版社
鎌田茂雄（1985）『仏教のきた道』原書房
小泉友賢著・徳雄職男編（1958）『因幡民談記』日本海新聞社
崔 正森（2004）『五台山 一百零八寺』山西科学技術出版社
斉藤 忠（1998）『中国五台山竹林寺の研究 －円仁（慈覚大師）の足跡を訪ねて－』第一書房
斉藤 忠（1999）『石窟寺院の研究 －インド・中国・韓国・日本の系譜を求めて－』第一書房
竹内理三（1982）「摩尼山」『角川日本地名大辞典 31 鳥取県』角川書店
田中淡編（1981）『中国建築の歴史』平凡社
立川武蔵（2000）『アジャンタとエローラ インドデカン高原の岩窟寺院と壁画』集英社
天水麦積山石窟芸術研究所編（1988）『中国石窟 麦積山石窟』平凡社
天台宗典編纂所編（1995）『みんなで聞こう 円仁さん』祖師讃仰大法会
名取洋之助（1979）『麦積山石窟』岩波書店
平田市誌編纂委員会（1996）『平田市誌』平田市教育委員会
文化財建造物保存技術協会編（2006）『国宝 三佛寺奥院（投入堂）ほか三棟 保存修理工事報告書』三徳山三仏寺、同（1992）『重要文化財清水寺本堂保存修理工事報告書』重要文化財清水寺本堂保存修理委員会、同（1999）『重要文化財焼火神社本殿・通殿・拝殿保存修理工事報告書』焼火神社
三朝町教育委員会（2002）『特別展 大三徳山 三徳山の歴史と美術』第17 回国民文化祭三朝町実行委員会
村田治郎・田中淡編（1981）『GREAT MONUMENTS OF THE WORLD 第17 巻 中国の古建築』講談社
米田範真（1968）『三徳山』
李恒成編・米彦軍訳（2005）『雲岡石窟と北魏の時代』山西科学技術出版社
楼 慶西・高村正彦（2008）『中国歴史建築案内』TOTO出版
若桜町（1982）「不動院岩屋堂」『若桜町誌』鳥取県若桜町
Korean National Commission for UNESCO, 1998: Kyongju: City of Millennial History: Hollym

（受付日2011年11月22日　受理日2011年11月30日）